

## 第二百四十七話 後世史家の批判に耐えうるか？

国家の命運を担う者は、後世史家の批判非難に十分に耐え得べく合理的な判断・指揮の責を負っている。それを考えさせる大東亜戦争の戦史がある。

### 1 捷1号作戦の発動とレイテ決戦への変更

1944/10/17、米攻略部隊はレイテ湾口のスルアン島への上陸を皮切りに、4個師団でレイテ島に強襲上陸を開始した。大本営は、18日夜「捷一号作戦」発動を命じた。台湾沖航空戦の大戦果(第65話 ②世紀の大誤報)を信じていた南方軍は、敗残の敵を撃破する好機到来として、既定計画を変更してレイテ決戦を大本営に上申し、25日未明第一遊撃部隊(栗田艦隊)のレイテ湾突入とレイテ地上戦への変更を内定した。

台湾沖航空戦の戦果に疑問を感じ、且つ戦力乏しく、制空権が奪われている以上、レイテへ兵員、物資を輸送するのは殆ど不可能に近いと判断した山下大将は反対した。マニラからレイテ島までの距離(約730km)を考慮すれば大将の判断は適当であった。第14方面軍参謀達も大本営、南方軍のレイテ決戦論に反対したのである。

然し、10月22日、寺内元帥は山下大将を南方軍総司令部に呼んで叱り飛ばし、『元帥は命令する』と一言述べた。山下はもう何も言えなかった。そして、「海軍が大戦果を上げているのに、陸軍が後れをとってはならない」との空気の下、次のような南方軍命令が下された。「一、驕敵撃滅の神機到来である。二、第14方面軍は海空軍と協力し、なるべく多くの兵力を以ってレイテ島に來攻する敵を撃滅せよ。」

### 2 海空総攻撃の失敗とレイテ地上作戦

前話(第245話)で記した様に海・空の総力を結集した敵攻略船団の撃滅を期した決戦は、逐次に各個撃破されて失敗した。



在レイテ島の陸軍第16師団は、組織的戦力を失い、米軍の上陸部隊は、7個師団に増加していた。第14方面軍にとって最大の課題はレイテへの兵員、軍需品その他の物資の輸送だったが、レイテ沖海戦の敗北により、一層困難になった。数個師団を輸送する計画であったが、レイテ島への海上輸送は厳しく、無事に上陸し得た第一師団のリモン峠の戦いが特筆されるが、補給なく増援なく逐次苦戦に陥りつつあった。

### 3 山下大将の作戦中止意見具申と作戦続行命令

11月上旬、第14方面軍司令部では、レイテ戦への憂慮が強くなり、9日南方軍総参謀長に『これ以上の続行は、後世史家の非難的になる。』と意見中止を求めた。

然し、11日寺内元帥は作戦続行を命じ、大本営もレイテ戦続行に強い意志を堅持していた。何故に斯くまで頑なだったのか？戦理的合理性を度外視した背景は何だろうか？

### 4 その後地上作戦とレイテ戦作戦中止

方面軍は、第二次航空総攻撃と和号作戦(26師団と第二挺進団による飛行場奪取作戦)を行うも、大勢は覆せず作戦は失敗した。

捷一号作戦の正式な打ち切りは、翌年1945/1/25であり、事後方面軍はルソン島の三大拠点に盤踞することとなった。方面軍は前話と同様の運命を辿ることとなる。

### 5 若干の観察

- (1) 合理的判断の欠如 制空・制海権なき輸送作戦、敵情判断の大甘、大作戦の急なる変更の無理、準備なき作戦の無謀
- (2) 上級司令部の現地状況把握及び大局判断の重要性(軍当局が中止判断ができないのであれば誰が判断するか?)「マレーの虎」の具申も一顧だにされずだった。
- (3) 方面軍の編組(飛車・角落ち?)にも、司令官や参謀長の補職時期にも問題あり

(了)